

柳生始末記

第一話

福元  
希高

## 第一話 張孔堂異聞

頃は寛永、江戸幕府第三代征夷大將軍徳川家光は、東照神君家康公法要のため日光東照宮に向けて江戸城を發つた。

尾張、紀伊、水戸の御三家は無論のこと、駿河大納言こと將軍実弟松平忠長もこれに従い、幕閣では大老・土井大炊頭利勝、同じく筆頭老中・松平伊豆守信綱が付き従い、これに親藩、譜代、そして主だった外様大名も後に連なり大行列を成して参詣に同行した。

恙無く法要行事を終え、江戸城に戻ってきた將軍家光を、異例ながら大手門にて出迎えたのは、春日局に抱かれた家光嫡男、まだ幼い竹千代であった。家光は二人を見て相好を崩し、

「春日、無事に戻ったぞよ。竹千代も変わりなく祝着である」

と上機嫌で春日局に声を掛けた。

「東照大権現様の法要、恙無く終えられましたこと、誠に祝着に存じまする」

春日局もにこやかに家光に口上を述べた。

家光は入城の前に、同行した幕閣重臣と御三家、一門衆それぞれに労いの言葉を掛けた。城内見送りのため左右に分かれて控えている先ず左側、御三家筆頭・尾張大納言義直、次に水戸中納言頼房、

そして右側に振り向いて紀伊大納言頼宣、家光にとっては叔父に当たる御三家当主一人ひとりに、丁重に謝意を述べた。本来なら位階の序列からいって、神君家康公第九子・尾張従二位権大納言義直の次は、第十子・紀伊従二位権大納言頼宣であって、第十一子・水戸正三位中納言頼房より先に言葉を掛けねばならなかった。いや、それより先に、尾張、紀伊と同格の家光実弟・駿河従二位権大納言忠長に、最初に慰労の言葉を掛けねばならなかった。閣僚たちの不手際であつたが、家光自身、幼き時分より不仲の忠長や、自分の將軍としての言動に不審と懸念を持つ叔父頼宣とは、普段から会話を交えることすら嫌がっていた。それでつい序列を無視してしまったのだが、家光はそれでも精一杯笑顔を作り頼宣に話し掛けた。

「紀州公、此度の日光参詣同行のこと、誠に大儀であつた。旅の疲れを癒してからゆつくり登城されよ。急がずとも良い」

「これは上様、有難きお言葉、恐悦至極にござります。上様こそ御城内にて、竹千代君と旅の土産話でお疲れの御身を癒されますよう」

頼宣は、序列無視に気付かぬ風で慇懃に答えた。頼宣は紀州五十万石の太守であつた。戦国大名の気風を留め、豪放で大胆、世間では南海の龍とか南竜公の異名で呼ばれていた。

江戸初期に於いて御三家とは、将軍家である徳川宗家と尾張、紀伊を指していた。それがやがて宗家は別にして、尾張、紀伊、それに駿河を加えた三つの大納言家が御三家と言われたのである。ちなみに徳川姓は宗家、御三家と雖も当主と世子だけが名乗ることができ、他には甲府家、館林家の御両典と、八代将軍吉宗の時、創設された御三卿の当主、世子が徳川を名乗ることが出来た。しかし御両典、御三卿とも宗家を憚り、御両典は甲府、館林の地名を名乗り、御三卿は江戸城御門内に賜った屋敷の名、即ち田安、一橋、清水姓を名乗るのを常とした。水戸家はそれらより格下の地位であったが、駿河大納言家が改易となり、その時、徳川を賜姓され松平改め徳川を名乗った。そして御両典の甲府綱吉が五代将軍、館林綱豊が六代将軍として宗家に戻り、御両典が解消された為、その時から水戸が御三家に加えられた。しかし本編では一般に言われる尾張、紀伊、水戸の御三家で話を進める。

家光は傍らに控えている弟、大納言忠長に向かって鷹揚に、

「忠長、此度は同行大儀であった」

と声を掛けた。家光の素っ気ない言葉を受けて、

「上様、お疲れにござりましょう、ゆるりと御休息されますよう」

忠長もそれ以上の言葉は出さずに頭を下げた。

家光は忠長から目を逸らし、くるりと背を向け引き上げようとした。その時家光は、何気なく叔父頼宣の周りを見渡しながら歩を進めた。ふと、紀州藩家臣列座の端に、跪いて拝礼している男に何気なく目をやった。その時、男が僅かに顔を上げ、そっと家光を見た。家光もその男の顔を見て、一瞬二人の眼が合った。

男は異相であった。その瞬間、男の眼が一閃鋭く光った、すぐに男は下を向き、家光も何事もなくその場を離れていった。

十日程、日が経ち、江戸城大奥総取締・大年寄・春日局は、将軍御座控えの間にて、只一人座って人を待っていた。やがて、

「お待たせ致しました」

声を掛けて老中松平伊豆守信綱が入ってきた。この頃、幕閣の中心として権勢を振るう伊豆守信綱は、将軍家光がまだ竹千代といった幼き時代から小姓として仕え、竹千代の乳母で当時、於福といった春日局に、自分が成人するまで教育を受けたこともあり、大恩ある春日局には筆頭老中と雖も、頭が上がりず言葉使いも丁重を極めた。実際に春日局は先年、将軍名代として禁中に上がり、朝廷より春日局の称号を下賜されている。その称号は平安時代より藤原氏の

女房が、天皇に仕えて親王や内親王の母になった者のみ賜るとい  
曰くつきの名称である。さらに官位、従二位を叙任され、江戸城内  
では家光の父、大御所（將軍隠居の尊称）秀忠・従一位太政大臣、  
そして征夷大將軍家光・従一位左大臣に次いで三番目の高位にあつ  
て、位階からしても松平伊豆守信綱・従五位下・侍従・などとは遙  
かに格上の存在であつた。一介の乳母だつた於福が何故このような  
地位にまで上り詰めたのか、おおみだい大御台・於江与の方（秀忠の正室）で  
すら未だ無官であり官位・従一位は彼女の死後、追贈されたもので  
ある。江戸城内將軍家光の日常と、大奥の全てを取り仕切る春日局  
の隠された謎はいずれ語ることにして話を進めよう。

「春日殿には御健勝にて安堵致しました。また竹千代君におかせら  
れても、益々お健やかにて祝着至極にござります」

世間からは「知恵伊豆」と呼ばれ、天下のまつりごと政を一手にみる信綱  
が恭しく挨拶を述べた。

初代神君家康と同じく、三代家光、そして四代を継ぐ家光の長子  
も幼名竹千代であつた。

「ほんに、やんちゃ振りは御当代様の方が上でありますが、竹千代  
君も相当にお元気なことです」

「おお、誠に目出度い。さりながら、將軍家はこれで万々歳といきたいところなれど、御子がまだお一人とはいささか心もとない。せめてあとお一人、いや、お二人、男子御誕生を願うものであります」  
「ほんに、竹千代君お一人では、何かあった時、と不安はありますなあ」

「この伊豆からも春日殿にお願い致します。天下の為、万民安寧の為、上様の良き側室をいま少しお選び頂きたく存じます」

「上様は難しい御気性ゆえ、側室選びも難儀致しております。御正室様は無論のこと、こちらが用意した選りすぐりの側女にも眼もくれず、ひたすらお万の方殿のみ御寵愛なされる有様」

ここで春日局はふうと息をついて、眉をひそめた。一呼吸おいて信綱が、

「お万の方様には御懐妊の兆候は窺えませぬか」

「あのお方は病弱ゆえ、御子を生すのは難しゅうござります」

「ううむ」

と、ここで信綱は考え込んでしまった。少し間があつて、春日局が居住まいを正して、

「豆州殿、今日は折り入って内々の話があります」

「おお、伺いまする」

ここで春日局から出た話はなんとも不思議なものであった。

將軍家光が日光東照宮参詣を終えて江戸城に戻り、暫くしてから  
の事である。大奥の寢所で、急に目眩がして食べ物を吐き出してし  
まった。すぐさま御典医が呼ばれ、診たところは別にこれといった  
症状はなく、つまるところ旅の疲れであろうという事になった。側  
に仕える侍女たちによると、こここのところ上様は、悪夢に悩まされ、  
熟睡ができず寝不足状態であるという。毎晩、床に就くと必ず夢を  
見て、その夢の中に出てくる魔物に取り憑かれて金縛りになり、う  
なされて体力を失い、食事も摂れなくなっているとのこと。この重  
大事を奥女中年寄から春日局に報告が入った。

心配した春日局が家光を見舞った時、憔悴しきった家光が春日局  
の手を取り、一部始終を打ち明けた。

「於福、余は毎晩夢の中に出てくる奇怪な男の顔に悩まされておる。  
助けてくれ」

「上様、この於福に全てお話し下さりませ。必ずやお救い致します  
る」

家光の話によると夢の中の男の顔は異相で、何処かで見覚えがあ

るという。その異相が夢の中で家光に取り憑き、金縛りにして身体中を蹂躪するが如く苦しめるという。もがき苦しみ、飛び起きても、まだ心臓の鼓動が大きく鳴り止まず、息もできぬほどであるという。そして或る夜、夢の中に出てくる異相の男を家光は突然思い出した。

「上様はこの春日に、紀州大納言頼宣公のお供の中に、その男の顔を見たとはつきり申されました」

「春日殿、たとえそれが上様の誠のお話であっても、夢の中の出来事では、その男を突き止めても咎めるわけにはいくまいかと」

「はい、されど、その者に何か憑き物を貰ったと上様は申されます。

私にはその男、呪い師まじなの類たぐいではないかと」

「何か呪術を上様に掛けたとでも申されますか」

「その通り、呪術の類の者であろう」

「御三家の中でもひとときわ剛毅な大納言頼宣様、迂闊に調べ上げるわけには参りませぬ。また事が表立っては一大事にござります」

「そのこと、そこで豆州殿に内々にてお願い致しておりますぞえ」

「ここまで聞き終えて、伊豆守信綱は目を閉じ暫く黙考していた。やがて眼を開き、

「陰陽、祈祷、呪術の類は、その方面の明るい者に密かに調べさせ

ましよう」

「奇妙な話なれど、相手の素性が判れば打つ手がありました。こは豆州殿にお任せします。くれぐれも紀州様には悟られなきよう何卒よしなに」

「万事心得ました。ひとまずこの伊豆守にお任せあれ」

春日局のもとを辞して、老中控えの間に退いた信綱は、近習に用を言い付けたあと公務に取り掛かった。暫く刻限が過ぎた頃、

「御免。お呼びにより参上仕った。但馬にごさる」

と声をかけて老臣が入ってきた。

「おお、これは但馬殿、お呼び立て致して御無礼仕った」

「なんの伊豆殿」

信綱に呼ばれて入ってきたのは、將軍家兵法指南役であり、初代御公儀惣目付（後の大目付）柳生但馬守宗矩であった。宗矩は二代將軍秀忠、三代家光の兵法・剣術師範であり、また惣目付として老中はおろか天下六十余州の諸大名を觀察する重職にあり、自身は大和国・柳生庄に所領地を持つ禄高一万石の大名でもあった。

劍法新陰流開祖・上泉伊勢守信綱の高弟として、新たに柳生新陰流を興した父柳生石舟齋宗嚴の五男に生まれた宗矩は、父石舟齋が

先の大御所家康公の兵法お手直し役に任じた縁で、家康の近習として仕えることになった。その卓抜な剣技と頭脳明晰さで頭角を現し、家康側近で懐刀として辣腕を振るう本多佐渡守正信、上野介正純父子の麾下、関ヶ原役、大坂冬・夏の陣にも従軍。家康の命で柳生一門衆と伊賀同心、甲賀同心を傘下にして陰の軍団を組織、その総帥として主に戦線の情報収集、諜報活動、敵将暗殺などの指揮を執り、徳川幕府初期形成の陰の立役者的存在であった。秀忠側近・土井大炊頭利勝が、大老に格上げされて事実上幕政中枢から退いた今、惣目付・柳生但馬守宗矩は、現政権の要、筆頭老中・松平伊豆守信綱と將軍の身边を仕切る大年寄・大奥総取締・春日局と共に徳川幕府を支える“鼎の脚の一人”と称えられていた。

双方挨拶を終えた後、伊豆守信綱は、先刻、春日局が語った將軍家光の奇妙な夢の様子を、こと細かく但馬守宗矩に説明した。

「なんとも奇妙な夢の話ゆえ、これは幻妙の世界に明るい但馬殿の知恵を拝借するしかないと思い、ここに御足労願った次第」

「ふむ、優れた呪術師は暗示を与えて夢を操るとは、その昔、話に聞いたことがござる。しかし、刀槍の術を以って仕える我が柳生には、陰陽の世界は無縁にござる。さりながら、我が柳生の里と腹背

擦りあう伊賀、甲賀の地の者には、鬼道の極意を会得した者もおると聞き及びます」

「おお、成る程、伊賀者」

「早速にも我が屋敷に御庭番頭を呼び寄せ、探索の手配を致しましよう」

「お任せ致す、くれぐれも表沙汰にならぬようお願い仕る」

「畏まってござる、他に悟られる心配は御無用。それでは御免」

柳生但馬守宗矩は静かに退いていった。

その夜、柳生屋敷の奥院に一人の老僧が端座し、但馬守宗矩の現れるのを静かに待っていた。法体の老人は江戸四谷麴町、専称山安養院西念寺の住職・西念という僧侶であった。やがて宗矩が姿を見せると恭しく拝礼して、

「但州様、西念、お呼びにより参上仕りました」

西念と名乗った老僧の顔には大きな傷痕があり、しかも右目が潰れていた。そればかりか左手も失っており、隻眼、隻腕の異形の風体であった。

「西念、いや三代目半蔵よ、夜分大儀である」

宗矩が少し笑みを湛えて老僧に応えた。

但馬守を但州様と呼ぶこの老僧、表向きは寺の住職・西念法師と呼ばれる。しかしてその正体は、先の大御所家康公家臣軍団・徳川十六神将の一人に数えられる服部半蔵正成の嫡男、服部半蔵正就であった。

ここで少しばかり服部半蔵一族について触れておこう。正就の祖父、初代服部半三保長は伊賀の豪族の出であった。若き頃、故郷を捨て諸国を転戦し、室町幕府十二代將軍足利義晴に仕えるが、幕府衰退に見切りをつけて出奔、その後、三河国・松平清康に仕える。やがて松平家当主・元康が徳川家康と改名する頃、半三保長が没し、その子正成が、半三を半蔵と改めて襲名し、二代目服部半蔵正成と名乗り家康の配下となった。父親譲りの忍びの技と槍の名手として数々の合戦で武勲を立て、“槍の半蔵”と異名を取った。しかし家康譜代家臣に渡辺半蔵守綱という武将がいて、同じく“槍の半蔵”と言われていたため、後に“鬼の半蔵”と称えられた。織田信長の命令で家康の嫡男、岡崎三郎信康が自刃に追いやられた際、介錯を務めたのも半蔵正成である。

明智光秀による本能寺の変の時、堺に滞在していた家康が少数の供のみで堺、伊勢、三河に抜ける間道、甲賀、伊賀越えをして逃げ

帰る道中、半蔵正成は甲賀、伊賀の豪族、上忍たちと話をつけ、岡崎まで家康一行を護衛させることに成功した。その功績で家康が江戸開府したとき、半蔵正成は与力三十騎、伊賀、甲賀同心三百人の総支配に任ぜられ、官位・石見守、知行八千石の大名並みの旗本に出世した。御公儀隠密頭領として君臨し、慶長元年に没して四谷・西念寺に葬られた。

正成の跡を継いだのが三代目半蔵正成であった。家康の末弟・松平定勝の長女を妻に迎え、官位も引継ぎ石見守を名乗る。武道、忍びの術にも長けて知患者であったが、生来の激烈な気性が災いし、強引、傲慢な態度で同心たちを扱い、彼らから強い反感を買う。同心たちは、我らは身分低きと雖も大御所家康公、將軍秀忠公直轄の与力、同心であり服部半蔵の家臣にあらず、と、檄文を掲げて四谷長善寺に籠り反旗を翻した。未曾有の伊賀同心二百人の反旗と、甲賀同心の同調で起きた事件を、幕府は長善寺を多勢の兵士で取り囲み、半蔵正成を解任する替わりに、反旗首謀者数名を処刑し、他は不問ということで無事に鎮圧。服部半蔵正成は総支配の職を解かれ、服部家は改易となり切腹を命ぜられた。だがしかし、天海大僧正、土井大炊頭利勝、柳生但馬守宗矩たちの助命嘆願が認められ、服部

家は知行を三千石に削られ、半蔵正就は妻の実家松平定勝にお預けの身となった。その後、大坂の役が始まり、正就は松平家を密かに辞して、家康の六男・松平忠輝の軍に加わり出陣するも、武運拙く天王寺口であえなく戦死したと伝えられた。

服部家は正就の弟・正重が四代目半蔵を襲名したが、すでに伊賀同心支配ではなく、江戸を離れて佐渡金山同心の身分となっていた。その理由は、妻の父親が幕府帷幄の重臣で、佐渡金山、石見銀山総奉行大久保石見守長安であった為である。だが不運は続く、義父大久保長安の死後、長安の膨大な不正蓄財が発覚、長安一族は全て誅戮された。正重は、死罪は免れたが家禄三千石は没収され、浪人となり果てたが、ここでも柳生但馬守の口利きで、兄嫁の実家松平定綱（定勝の子）のもとに身柄預かりとなった。

三代目服部半蔵正就が失脚したあと、表向き「御庭番」と呼ばれた公儀隠密組織は、そのまま幕府惣目付に就任する柳生但馬守宗矩の率いる陰の軍団、裏柳生に組み込まれ、全てが柳生支配下に置かれた。宗矩から直接指示を仰いで活動する事になった同心組は、これまで通り伊賀、甲賀に分かれ、伊賀組は四谷伊賀町、甲賀組は青山甲賀町にそれぞれ組屋敷を与えられて生活していた。

さて、今宵、但馬守宗矩と対峙している三代目半蔵正就であるが、大坂夏の陣で討ち死にしたと伝えられたが、事實は瀕死の重傷で倒れていたところを、偶然にも裏柳生の軍団に発見されて、後方に運ばれた。その時、正就はすでに片目と片腕を失っていた。大御所家康の勘気が解けぬ身なればやむなしと、宗矩の指示で大和国・柳生庄に匿われた。やがて家康が他界、正就は密かに江戸に上り、父・二代目半蔵正成の菩提を弔うため剃髪し、父の眠る西念寺の住職となり、自身も西念と名乗った。

但馬守宗矩が、隠密組織の総支配として伊賀、甲賀の国里の豪族、上忍たちを束ねて、動かすには、伊賀地名家の出自、服部一族の協力が必要だった。上忍の藤林長門守一族、百地三太夫一族より名門服部一族は、伊賀国里ではまだまだ強い勢力を保っていたのである。

彼ら伊賀衆の中心人物だった故二代目半蔵正成には、もう一人の男子がいた。つまり長男・三代目正就、次男・四代目正重の末弟、正広である。但馬守宗矩は、この正広の後ろ盾となって伊賀の里、服部家の当主に座らせ、新たに忍びの集団を組織して頭目に据えた。しかしながら、正広は改易になった服部半蔵の名を襲名する事はなかった。また宗矩は、江戸にいる兄の西念法師・正就を、宗矩の耳

目役として使い、弟正広の陰の後見人としたのであった。

話を戻そう。柳生屋敷奥院で、但馬守宗矩から將軍家光の奇妙な夢の一部始終を聞いていた西念こと正就は、ゆっくりと口を開いた。

「鬼道・憑き夢にござりまする」

「うむ、鬼道か、やはり。御庭番同心どもを呼びつけるより、其の方を呼んだのが正しかったようだの」

「恐れ入ります、但州様。さりながら、我ら伊賀、甲賀の忍びの技にはござりませぬ」

「それでは紀州根来はどうかの、若しくは風魔の残党ども」

「あいや、それも違えまする。おそらく忍びの世界ではありませんま  
い」

「いずれにせよ、この慮外者、上様を殺めようとするれば可能な距離であり、我ら警護の責めは免れぬところであった」

「御意。しかしながら、その曲者の目的は、何処にありましようや」  
「そうよな、上様のお命を狙ったわけではなかるうが、解せぬ事である」

「但州様、鬼道・憑き夢の呪術でも上様の御命、失い参らす事、できませんる」

「ほう、左様か。仮に大事となれば、公儀惣目付の当家の面目は丸潰れだな。うむ、それだけでは済まぬ事態となろう。其の方父子が手塩にかけて創り上げた公儀御庭番も責めを負わねばならぬ」

「仰せの通りにござります。さはさりながら、その者、何故に、如何にして、紀州様の従臣の中に紛れ込んでいたのでしょうか、先ずはそこから探る事となりましような」

「西念よ、それで其の方に来て貰ったのだ。此度はわしに考える事あつて、御庭番同心は使わぬ。御三家紀州公御膝元を調べる事になるので、公儀が裏で動いたと知れては一大事。事は隠密裏に運ばねばならぬ。この一件、其の方に命じる。よいな、其の方の裁量で、伊賀国里におる正広の一党を使うが良いぞ」

「御詮、畏まってござります」

「紀州大納言卿、昨今、大坂の役で溢れ出た浪人共の中から、名のある者を雇い入れているとの噂もある。西念よ、紀州の国許にも探りを入れねばなるまいな」

「心得ました。先ずは鬼道を操るその曲者を調べ出しまする」

「さて、その前に上様の夢の中の憑き者を、どう退治しようぞ」

宗矩は、左手に持つ扇子で首を軽く叩いた。

「幸いな事に、江戸外れにある我らの隠れ里に一人、鬼道に長ける者が住んでおります」

「ほう、異なことを申す。其の方、伊賀者にはおらぬと今申したばかりではないか」

「あいや、さにあらず、その者伊賀の出ではありません。しかも生まれつきの盲めしこでござりまして、よって忍びではありません。その者、若き頃から神変不可思議なる振る舞い多く、いつの間に鬼道を身に付けました。盲なれどお役に立つかと。是非その者に鬼道・憑き払いをさせましょう」

「西念、いや三代目よ、其の方の家も多種に亘って変わり者がおるのう。だがいかにして上様の御面前に、その者を引き出そうかの」

「畏れながら、春日局様にお問い合わせは如何かと。対面の儀は大奥にて」

「なんと、上様以外、男子禁制の大奥に入れると申すか。それは無理である」

「但州様、その者、それがしの腹違いの姉でござる」

西念法師はそう言うてにやりと笑った。

江戸城内大奥、側室お万の方のみを溺愛する家光であったが、こ

このところ体調優れず大奥に渡るのは久方振りのことであつた。この夜は御寢所には入らず、將軍御座所にて大奥総取締・春日局と対面した。笑みを湛えて家光を待っていた春日局の後方に、老女が平伏していた。ちらつとそれを見て家光は、將軍の座に腰を落ち着けると、

「於福、話は聞いた、余はどうすれば良いのか」

「上様、これに控えおります老女は、桂女と申す者。かつらめこれよりこの桂女が、上様に取り憑いた夢の中の悪霊を、憑き払いという呪術にて取り払いまする」

「うむ、苦しゅうない、面を上げよ」

顔を上げ、じっと目を閉じて端然と座る老女の姿は、すでに齡九十は越えているようにも見える。干からびた皺だらけの様相は不気味な雰囲気を漂わしていた。

「上様、悪霊払いの為に、何卒この桂女を御面前に進むことをお許し下さりませ」

「相分かった、近う参れ」

「桂女、上様直々のお言葉である。もそつと御前に進み出でよ」

春日局の指示に、桂女と呼ばれた老女は、盲人とは思えぬ動作で

静かにすすつと、家光の眼前近くまで進み出て正座した。

「上様、誠に恐れ多き事なれど、この場にて暫く、この婆の顔を御覧下さりますよう」

低い声で言うのと桂女は、両手を開いて家光の正面に突き出した。そしてゆっくり両手の親指を横水平に、人差し指を天に真つ直ぐ立て、家光の顔前に翳す様に再び突き出した。

つり込まれるように家光は、桂女の翳す両指の間から見える、老婆の顔をじつと見つめた。その時、桂女の両眼が少し開いた。光を失った盲の双眼が、鈍い色を帯びて家光の目を見つめた。一瞬、老婆の両眼が鈍く光った。やがて、桂女は何も無かったかの如く拝礼して後方に退いた。

家光はぼかんとした顔付きで宙を睨んでいる。

「桂女」

春日局が老女を見て叫んだ。

「全て終えましてござります。私めはこれにて失礼させて頂きまする」

桂女が擦れ声で答えた。憔悴しきった表情で、その姿は最前より一段と小さくしぼんでしまったかのように見えた。

「上様」

春日局が、家光の側により顔を近づけて呼んだ。

「於福、余は休むぞ」

家光は、気が抜けたようにそのまま、すたすたと寢所に向かって去っていった。

数日経ち、江戸城内・大年寄控えの間にて、春日局と松平伊豆守信綱が二人きりで話し込んでいた。

「柳生但馬殿の差し向けた鬼道師の老女は、無事お役目を果たされましたか」

「はい、あの夜、上様は憑き払いなる呪いまじなをかけられ、終えてすぐに床に就かれました。そして、いつもの悪夢が展開されました。な。ところが此度は様子が変わりました。夢の中に出てくるその異相の男の他に、もう一人老婆も現れて、双方睨みあい、やがて二人が一つに重なったと思われた瞬間、大きく膨らんで破裂したそうです。上様はそこで夢から覚めて、少しずつ顔に生気が甦ってこられたそうです。その後、暫く経つても、二度とあの悪夢は見なくなると申されておられます。先程お目もじ叶うた折も、以前のようにお健やかなご様子でした」

「おお、それは重畳にござります。鬼道・憑き払いが効いたようですな」

信綱は、胸を撫で下ろしたような顔付きで話を聞いていた。

「さて、それでは上様の御体調のことは春日殿にお任せ致します。

それがしは但馬殿と後始末を話し合いますれば、これにて御免候らえ」

「豆州殿、ご苦勞をお掛け致しました」

三ヶ月が過ぎた夜。柳生屋敷内奥院にて但馬守宗矩は、西念法師の報告にじつと耳を傾けていた。

御三家紀州公の家臣に混じって、將軍家光に呪術を仕掛けた張本人の身元が割れたという。その男の正体は、楠木不伝と名乗る軍学者ということである。江戸・神田連雀町の裏店に楠木流軍学塾・張孔堂を開き、自身は南北朝の英雄・大楠公こと楠木正成の末裔であると、訪れる門弟志願の若者たちに吹聴している初老の男であった。

西念の指揮下、伊賀者の調べによると、男は本名楠木正辰、号を不伝と称す。楠木氏・正統子孫の証しとして、先祖・楠木正成の愛刀と一流の菊水の旗、系図、兵法奥義書を携えて寛永の初め頃に江戸に現れ、〃武芸百般に通ず・楠木流軍学指南・張孔堂〃の看板を

掲げたのであった。歳は六十近く、一人娘とその婿養子富士太郎の三人で塾内に住んでいる。近頃とみに評判の軍学塾で、講義が面白く、門弟が増えているという。

「大楠公の末裔とは笑止千万」

但馬守宗矩が笑いを堪えてつぶやいた。

「実は、ご報告が遅れましたは、その者の名に些か思い当たる事あり、国許の弟・正広配下の手錬れを、数名畿内に走らせました。調べてみると、色々面白い話が出て参りました」

「ほう、ゆつくり聞こうか」

「案の定、あの楠木不伝正辰、大騙りでございました」

西念が語り始めた。その昔、京都鞍馬寺の劍僧八人が興した鞍馬八流の劍技は、もともと法体の陰陽師、鬼一法眼が編み出したものだという。その鬼一法眼という人物は、源九郎判官義経の劍法の師であるという伝説で名を知られている。一説によれば、鬼一法眼は京都一条堀川に、鞍馬京八流兵法所を開設し、隆盛を極めた。鬼一法眼没後も代々高弟が継いで、そこから輩出された門弟の数は延べ総勢六千人に及んだという。もともと堀川には朝廷の陰陽師頭、安倍晴明を祖とする土御門家が屋敷を構え、諸国陰陽師の本所として、

玄妙呪術師たちの上に君臨していた。鬼一法眼はその門に縁を深め、一門衆としても名を馳せると共に、鬼道師として、また劍客として異才を放つ存在となった。その開祖鬼一法眼・鞍馬京八流も代が替わるにつれ、法眼流、京八流、京流、などの様々な流派に分裂されていった。時は戦国の世に様変わりする頃、京の都に玄海という怪僧がいた。元々は鞍馬寺の劍僧の一人だったが、素行が悪く、日頃から淫欲に耽り、大酒を飲み、鳥獸を喰らう外道の者で、とうとう鞍馬寺を追放された生臭坊主であった。一条堀川の法眼流兵法所に身を寄せ、法眼流当代の下ですっかり改心した如く振る舞い、劍技より鬼道の方にその才能を發揮した。その玄海に玄一という男子が生まれる。これが後に述べる異相であった。父玄海が没した後、鬼道術を受け継ぎ、卜占、祈祷師を生業としながら、縁あって河内国領主・大饗<sup>あえ</sup>正虎の軍法卜占師となった。やがて主君正虎が死して、嫡男正辰が家督を継ぐと、早速それに取り付いて信任を得るに至った。

実はこの大饗家こそ、正真正銘の建武中興の英雄、楠木正成の末裔であったのだ。室町時代、長きに亘り足利將軍家からは朝敵と見做され、姓を楠木から大饗と変えて戦国を生き抜いてきた。一時、

大饗正辰は豊太閤秀吉の右筆を務めた縁で、楠木姓に戻る事ができたが、徳川家康の代に家は消滅した。時が流れ、関ヶ原、大坂の役を経て、徳川江戸幕府が確立された三代将軍家光の代に、突然江戸に現れた正辰は、神田連雀町に軍学塾を開設したのである。だがそれは鬼道師玄一が楠木正辰にすり替わった姿であった。玄一は何食わぬ顔で、楠木正成より数えて十四代・楠木正辰、号不伝と称し、張孔堂の看板を掲げ軍学塾の当主に納まっていた。

「なんと不敵な奴。本物の楠木正辰は殺されたかのう」

宗矩が呟いた。

「恐らくは。玄一めは主人正辰を闇に葬ったあと、家伝兵法書、菊水の御旗、伝家の三条小鍛冶宗近の脇差を奪い、逐電したものと思われます。逃げ隠れした後、寛永の今になって江戸に現れたという事でござります」

「良くぞそこまで調べた、ご苦労である。今一つ聞かすが、紀州の南竜公にはいかにして近づいたのであるか」

「紀州家重臣の子弟が、この軍学塾の門を叩いており申す。恐らくはその繋がりかと存じます」

「危ないところであった。此度の一件が表沙汰になっておればと思

うと、背筋が寒くなるは。上様のお側近くに不逞の輩が近づき、怪しげな呪術を掛けたとあつては、表向き將軍家兵法指南、惣目付の身分なれど、裏の身边警護を務る御庭番総帥として、我れは無論のこと、主だった同心組は切腹ものである」

「誠に仰せの通り」

西念こと三代目半蔵正就も身を竦めて答えた。

「それだけには治まらぬぞ西念、御三家紀州公がその一件で絡んでいたとすれば、天下騒乱の一大事とも成り得る話だ」

「御意、但州様のご指示通り、事は隠密裏に運ばねばなりません」

ここで但馬守宗矩は、声音鋭く言い放った。

「西念よ、これより張孔堂軍学塾の門弟で、紀州家に縁する子弟たちと、偽・楠木不伝の身边を探ることを命じる。偽者のそ奴は、いずれ始末するでしょう。併せて、駿河大納言家の動きも探れ、御当代・御弟君を南海の龍が呑み込もうとする気配がある」

「御下命、承って候」

低く答えて、西念法師は退いていった。

江戸神田連雀町、二軒長屋を吹き抜けにして細々と立ち上げた軍学塾張孔堂であったが、評判が上がるにつれ、あれよあれよという

間に門弟達が増え始めて、手狭になった講義場を一旦は広く改装したのであったが、武術道場も新たに開設する事となり、裏手に林立する土地を購入し、開墾して大道場を新築して、全てをそこに移す事となった。町方の職人衆を総動員して新装なった大道場は、住居居並ぶ町内からは。威風堂々の構えとして異彩を放っていた。

春宵、月光鮮やかに地を照らす夜、大道場の中央に一人立つ姿があった。張孔堂の主楠木不伝あるじであった。年恰好はすでに還暦を越えたように見えるが、白髪混じりの大きな頭、太い首、がっしりとしてやや肥えてずんぐりした体躯、そして顔付きが異様であった。先ず太くて濃い眉毛が左右一直線に真っ直ぐ繋がっており、おまけに眉間の縦筋が一本太く、くっきりと上下に刻まれ、まるで顔面の中心を十文字が走って見える。そして双眸は大きく窪み、双眼が不気味な光を帯びて、正しくこれは異相であった。

不伝は白い着物に黒の袖無し羽織、脇差を腰に帯びて立っている。「おお、どうやら憑き夢が崩されたようだな」

別に驚く風でもなく、低く不伝が呟いた。と、その時、道場の入口の戸が開いて一見若そうな男がぬうつと入ってきた。すたすたと不伝に近づき、

「お師匠様、ここにおられましたか」

立ったまま、男が不伝に話し掛けた。

「富士太郎、憑き夢が破れた。江戸城内にて憑き払いを講じた者がおるようじゃ」

富士太郎と呼ばれた男は、にやっと笑っただけで黙って聞いている。年恰好は四十前の太柄な男であった。色白で少し丸い顔立ちの、男ながら中々の臍たけた顔付きである。

「憑き夢が見破られたということは、柳生但馬に知れたということ、遠からず裏柳生か御庭番がここを嗅ぎ付けてくるは必定」

不伝は富士太郎の方に向き直り、

「わしはの、公方を殺すつもりで憑き夢を仕掛けたのではない、見破られるのは承知の上のことだ」

「お師匠様、憑き夢の目的はなんでござりますか」

富士太郎が目元を細めて不伝に問いかけた。

「知れたこと、將軍家光と御三家の紀伊、そして駿河を加えた天下騒乱の先ずは一石よ」

「公方と弟・駿河大納言の不仲に紀州公も一枚加えるということですな」

「そうだ、わざわざ南童公の行列に紛れ込んで公方に近づいたのはそのこと。用心せよ、先ず柳生が動くぞ」

不伝がにやりと笑うと、

「面白そうでござりますな」

富士太郎も不敵に答えた。

やや間をおいてから、不伝は何かを思い出したように富士太郎に、

「富士太郎、お前を少年の頃よりこのわしが目を掛けて、のち婿養子にまでしたのは、お前のその面構えだ。その顔に鬼道を仕込むに叶う器量を、わしが見たからだ」

「はい、お師匠様には剣法より鬼道を多く仕込まれました」

「そうだ、剣法などは見戯に等しいもの。鬼道・金縛りはな、剣を構えて対峙する者も、一瞬に操ってしまうものよ。また衆の中に置かれても同じこと」

「お師匠様は、軍学の講義の中にも鬼道を操っておられますな」

「鬼道・衆眠よ、気付いておったか」

矢庭に、不伝の双眼が光り叫んだ。

「富士太郎、わしの太刀受けてみよ」

さっと脇差を抜くと馬手に掲げ、富士太郎に斬り掛かった。だっ

と富士太郎が真横に身を捻ってかわす。

「おりゃあ」

気合一閃、不伝が間を詰めてさらに斬りつける。富士太郎の身体が宙を跳ね、これもかわして身構えた時、一閃、富士太郎の双眼が光った。

「ぬっ」

一瞬、不伝の足が止まったように見えた。富士太郎が少しづつ後方に身を引きながら受けの構えに移った時、不伝は、ぱちんと音を立てて脇差を鞘に納め身を引いた。

「できるな富士太郎、このわしに憑き・金縛りを試すとは」

「あいや、お師匠様、私はまだまだ未熟でござる」

「いや、さにあらず、見事であった。これが身に付けば一応の身を守る事はできようぞ。だがな、これは誰にでも通じるものではない、

極意を極めた敵が、予めこの術を知っているは、到底通用しないな」

「それは心得ております。この術は、相手によって使い分けます」

富士太郎が涼しげな顔で答えた。額に浮き出た汗を拭いながら不伝が。

「鬼道も軍学も、お前にはもう教える事はない、全て伝えたは。さ

て、以前から考えていたのだが、良い機会だ、只今からお前に名を  
与えよう」

そう言う和不伝は、道場の隅にある小机の上に置かれた文箱から  
紙を取り出し、さっと開いて、書かれてある文字を富士太郎に向け  
た。書面には、「由比民部介正雪」と墨痕淋漓に書かれていた。

「ゆい・かきべのすけ・まさゆき、と読む。お前の故郷、由比の地  
名を頂いて姓は由比、名はわしの正辰から正を取って正雪。どうだ、  
爾今、お前はこの姓名を名乗るのだ」

「ゆい・かきべのすけ・まさゆき」

富士太郎が声に出して名を読んだ。

「おおそうだ、門弟たちには、ゆい・みんぶのすけ・橘たちばなの・しよ  
うせつ、とでも呼ばせるのだ。そうだ、しようせつ、と呼ばせよう  
ぞ」

さも愉快そうに不伝は上機嫌で笑った。

「さて、富士太郎改め民部介よ、何故、楠木姓にしないか分かるか、  
これより柳生から放たれた刺客がわしを襲うだろう。降りかかる火  
の粉を払うは、わし一人でよい、お前にまで危険が及んではならぬ、  
それを避けるためだ」

不伝は遠くを見る様な目つきで話を続けている。

「明朝早く、お前はここを出て、紀州家の下屋敷に身を潜めておれ、手筈はすでにできておる。わしの身に万一の事があっても騒ぐではないぞ、娘は暫く他家に預ける、お前は落ち着いてわしの跡目を継ぐ事だけに力を注げばよい。南竜公が後ろ盾となってくれることだろう。よいな、要らざる心配は無用と知れ」

富士太郎改め由比民部介正雪は、黙って不伝のいう事を聞いていた。やがて民部介が去ったあと、不伝は道場の外に声を掛けた。

「風魔三人衆、来ておろうな」

暫く間があつて、

「我ら三鬼、最前より参上致しております」

「待っておったは、中に入れ」

すうっと戸が開き、音も無く、笠を被った三人の屈強そうな男が入ってきた。二人は浪人風の侍、もう一人は法体の修行僧のようないでたちであつた。それぞれが被っていた笠を取って、

「風魔の朱鬼斎しゆきでござる」

「蒼鬼斎そうきにござる、お久しゅうござつた」

「白鬼入道びやくきにござる。不伝殿にもお変わりなく」

と、一人ずつ名乗った。それをちらっと見て不伝は、

「暫く会わねど、其の方ら、ちつとも変わらぬようだの」

不伝は道場正面にある主座に腰を落とし、風魔三人衆も前列に座した。

「其の方らは風魔乱破らっぱの残党なれど、我が父、玄海の興した鬼道の高弟である。言わばわしとは兄弟弟子、その古き縁でここに呼び寄せたのは、此度の事が露見した時を慮つてのこと。約束の金子はここに用意してある、今手渡すぞ、ふふふ、ちと高くついたがの」

「念の入った言葉、忝い。我ら風魔衆にとって、柳生一門と伊賀、甲賀の忍びたちは不倶戴天の敵、百年の怨念は未だ消えず。良い機会でござる、不伝殿をお守りし、きやつらを血祭りに上げましようぞ」

「うむ、よくぞ申した。明日にも襲って来るやも知れぬ、三鬼よ、頼むぞ、きやつらに一泡吹かせてくれん」

深夜の道場に、男達の哄笑が響いていった。

明くる日、張孔堂軍学塾頭・楠木不伝の養子で、軍学師範代・楠木富士太郎改め由比民部介正雪は、不伝の一人娘で今は民部介の妻を、他家に預けるため道場を後にした。自身はこのまま帰らず紀州

家の下屋敷に身を隠すようにと、不伝からきつく言い付けられている。

その日の夜も、月が夜空に高く輝き、地上を煌々と照らしていた。

不伝は一日中道場で過ごし、夜の更けるのを待っていた。道場に佇んで居た時、姿は見えぬ声だけが不伝に囁いた。

「不伝殿、きやつら来ますぞ、どうやら裏柳生ではなく、伊賀の忍びにござる」

「分かった、手筈通り、裏手の林に誘い込もう」

不伝は大小両刀を腰に差し道場を出て、ゆっくりと近くの林群に向かって歩いていった。やがて林に辿り着くと、月光射し込む林の中に、立ち止まることも無く、構わずにどんどん分け入っていく。林の中は流石に樹木が月光を遮り、闇が不伝の身を包んだ。暗闇の中、不伝は立ち止まって、辺りの動く気配を静かに感じ取っていた。

油断なく不伝は、少しずつ立つ位置を変えていく。射し込む月光に照らされ、十文字の顔面がくつきりと現れ、闇の中に不伝の異相が妖しく浮かび上がった。と、その時、右横の樹木がさつと二つに分かれて、音も無く黒い影が不伝に襲い掛かった。その動きに合わせて不伝の十文字面相の双眼がきらっと光った。黒い影の動きが一

瞬止まった、間髪を入れず不伝の抜き打ちが走り、黒影の忍びの者は、僅かなうめき声を残し、地に崩れ落ちて絶命した。再び不伝の異相だけが月光を浴びて浮かび上がっている。暫く静寂が闇に流れた。やがて闇の中から男の声がした。

「楠木不伝の偽者、玄一坊、鬼道・金縛り、見事なり」

「伊賀者か」

不伝が闇の声の主に向かって低く答えた。その時、またもや暗闇と静寂しじまの中、木立が音も無く揺れ、黒影が一つ飛んだ、同時に月光を浴びた不伝の十文字面相・双眼からまた一閃の光が走る。動きが停止した黒影を、藁人形を断ち切る如く、不伝が斜めに太刀を振り下ろした。ぎゃつと声を上げ黒影が足元に突っ伏した。

「鬼道・金縛りだ、きやつまの目を見るな」

闇の奥から男の低く叫ぶ声が発せられ、ひゅうつと忍び笛が空を切って流れた。それを合図に樹木が三つに割れた、黒影が三方に飛び散る。また他方の樹木が同じく分かれ、三方に飛び離れる。五人、六人、まだ気配の見せぬ影も潜んでいるようだ。

「出番のようだの、不伝殿」

不伝の後方から声がした。闇に忍んで様子を窺う風魔三鬼であつ

た。それに気付いたか、またしてもひゅうつと忍び笛が闇を走り、三鬼の方に向かって伊賀衆が空を飛び、対陣を組んで取り囲んだ。

「ほう、わしの相手は残った三人、面白い」

不伝が叫ぶと同時に闇の中に身を隠した、最早、常人には姿を見ることは困難であろう。静寂を貫くように、ひゅつという空気を切る乾いた音が、一つ、二つ、三つ、そのつど樹木に突き刺さる音響が、<sup>こだま</sup> 罅ように闇に流れた。風魔三人衆、伊賀忍び衆が、それぞれ飛び道具を使用したと、はっきり分かる音であった。また暫く不気味な程の静けさが戻り、その静寂を縫<sup>しじま</sup>って、りいんと鈴の音が糸を引くように暗闇の中に鳴り響いた。続いてまた一つ、りいん、ゆつくりと二つ、三つ、と、鈴の音が断続的に鳴り渡る。暫く鳴り続いたあと、断末魔の絶叫が、闇のあちこちに響き渡った。そしてその後は、木の揺れ動く風音しか聞こえぬいつもの静寂が、林の中に戻っていた。

柳生屋敷の中庭に、程良い規模で造られた池、そこに泳ぐ鯉の群れに餌を投げ入れる但馬守宗矩の姿があった。やがて、庭園の入口から一人の若い武士が近づいて来て、背後から声を掛けた。

「父上、ここにおられましたか、只今、城より戻りました」

「左門か、上様の御身に変わりはないか」

振り向きもせず宗矩が言った。

「はい、その後、上様にはお変わりござりませぬ」

「それは重畳、これからも上様の御側にてお守り致せ。おお、それからのう、国許の十兵衛より書状を携えて、右影うかげと小炎こえんが戻っておる」

「おお、ということは、兄上は大和にお帰りになっておられましたか、御壮健でありましような」

「帰国してすぐに征木坂道場に籠り、劍の工夫を始めたそうな。あやつから次々に生まれる秘劍の技、また幻妙な暗殺劍の数々、親のわしから見ても常人に非ず、まるで魔性が棲み付いているようだの。敵を倒す胆力、天稟の技の冴え、必ず相手を斬らずには済まぬ激しい気性、これは亡き父上にも無かったことだ、親のわしですら恐ろしくもある」

聞いている左門が笑いながら、

「しかし父上、兄上の劍の工夫のお陰で裏柳生が組織され、惣目付、御公儀隠密衆の総帥として父上が君臨されておられるのではありませぬか」

「そうよな、十兵衛は人を斬る為に生まれてきたような危険な男だ、到底、お城仕えなど、お前のように務まるものか」

左門と呼ばれた若者は、宗矩の次男・友矩であった。幼少より眉目秀麗で明るく素直な性格、柳生の家臣からも好かれ、剣法の筋も良く父・宗矩よりすでに柳生新陰流の印可を受けている。嫡男・十兵衛三厳が先年、將軍家光の側近の役目を解かれ、国許大和・柳生庄に退去したあと、宗矩が十兵衛の替わりに左門友矩を、家光の近習及び剣法御相手役としてお城勤めをさせていた。家光は友矩の性格をこよなく愛し、大いに気に入った証として、徒頭、刑部少輔に任官して重用した。

二人の話に出た宗矩の嫡男・十兵衛三厳は、世間では將軍家光の勘気に触れ、罷免されたとの噂であったが、事實は違っていた、父宗矩から暇いとまを願い出たのである。宗矩は十兵衛の激しい闘争心と胆力、類い稀なる剣の冴え、常に新たな剣法を生み出す才能、それらを見込んで陰の軍団、裏柳生を組織して、その頭領に据えたのであった。主な役割は、柳生新陰流高弟たちが、六十余州各地の大名に兵法師範役として仕官しているのを利用して、各藩の情報収集、外様大名の不穏な動きの監視、御公儀隠密衆の指揮権、暗殺など実行

役の決定、それら全ての事を十兵衛は任されていた。一応、表向きは、国許・柳生庄、征木坂道場に於いて門弟たちに剣法の指導をする。将軍家御流儀、天下の柳生新陰流ともなれば、全国各地から集まる門弟の数は、数千、数万に及ぶという。しかし実際は、征木坂道場にいるのは年に数ヶ月、もう一つの裏の顔として、宗矩の指令の下に、時には単身で東奔西走、またある時は隠密集団の頭領として指揮を執り、幕府の裏の世界で暗躍していた。

ここで十兵衛、左門の父宗矩の事について、もう少し触れておこう。宗矩という人物は、将軍家光から官位、従五位下に叙任、但馬守に任官されるほど信任厚く、大和・柳生藩主、知行一万石の大名に列し、また幕府にとっては欠く事のできない重臣であった。

彼は将軍家兵法指南役と幕府惣目付の役割を見事に使いこなしていた。任務遂行に当たっては、瞬時の冷静な判断、合理的な処理能力、私情を挟まぬ冷徹な決断、まったく隙の無い政治手腕を發揮していた。

柳生新陰流を興した石舟斎宗庵が没し、柳生宗家の家督、当主は五男の宗矩が継ぎ、大和・柳生の地と知行全ては彼のものとなったが、これは先の大御所徳川家康の命に従ったものである。二代将軍

秀忠の代に幕閣に加えられた宗矩は、徳川末代まで続く強力な基礎作りにその生涯を捧げる決意を固め、劍客として柳生新陰流の正統を継ぐ事を自ら放棄した。これには他にも理由があった。本来、正統を継承する筈の長兄・新次郎嚴勝が、若き頃に戦場で鉄砲による深手を負い、不具の身となり、とても兵法者として父の跡目を継ぐことは叶わず、兄に期待を寄せていた父石舟斎の深い悲しみと落胆を、宗矩はよく知っていたからでもあった。

父を尊敬し、兄を敬愛していた宗矩は、長兄・新次郎嚴勝の子、兵庫助利嚴に劍の才を見出し、柳生新陰流劍法の正統を自ら進んで譲ったのである。また宗矩は、徳川御三家筆頭の尾張大納言義直卿の劍法師範役として、甥に当たる兵庫助利嚴を推挙し、彼の身を引き立ててやった。ここに柳生新陰流正統、柳生兵庫助利嚴、初代尾張柳生の誕生であった。

実際、甥の兵庫助利嚴は宗矩から見ても、劍の腕は天賦の才に溢れていた。実子十兵衛と互角、或いは時によって上かも知れぬと思っている。宗矩はまた、柳生新陰流正統を兵庫助利嚴ではなく、十兵衛三嚴に譲る考えは毛頭なかった。十兵衛が陰の軍団・裏柳生の頭領である以上、またその激しい気性からして、正統を継がせる

訳にはいかなかった。それどころか、宗矩は心中本気で、柳生宗家及び大名柳生藩主の跡継ぎですら、嫡男十兵衛の廃嫡を考えていた。それほどに父宗矩から見て、十兵衛は狂気に近い剣の天才であったのだ。柳生家の跡目相続は、次男・左門友矩か、十兵衛と同腹の子、三男・又十郎宗冬に継がせようと、宗矩の腹はどうに決まっていた。

但馬守宗矩が、将軍家御流儀・柳生新陰流兵法指南役であり、甥の兵庫助利厳が、柳生新陰流正統として尾張家剣法師範役であると、はっきり立場が決まってからは、宗矩はできるだけ兵庫助を遠ざけることにした。<sup>ま</sup>政と剣の道と、はっきり区別し、一線を引く為であった。

御公儀惣目付として、場合によっては尾州藩とて監視の目を向けねばならぬ立場である以上、親類と雖も馴れ合いは許されなかった。そのため世間では、江戸柳生と尾張柳生の対立、但馬守宗矩と兵庫助利厳の不仲説が流れたが、宗矩はかえってその方が、都合が良いと思っていた。兵庫助の方も頭の切れる男であったので、叔父・宗矩の心中を察し、特別会おうとはしなかった。

「父上、尾州公が御帰国の為、供をする兵庫助殿が本日江戸城内にて、私に会いに来られ、暫くお暇致すとの挨拶を受けました」

「兵庫の方から参ったのか、愚かな、使者を遣わせれば済むことを」

「徒頭になった私の成長ぶりを見たくて、参上したと申しております」

「それはもうよい、分かった」

宗矩がにべ無く答えた。

「父上、いつも思うのですが、兄上と兵庫助殿が立ち合うたら、どちらが勝ちましょう」

宗矩がちらつと左門の方を見た。

「兵庫が柳生新陰流正統を継いだ以上、相手が十兵衛であろうと勝つて貰わねば困る」

「それは兵庫助殿の立場上の事、実際はどうなんでしょう」

左門が誠に無邪気な顔付きで問うているので、宗矩が珍しくそれに答えた。

「木刀にて、御前試合のような、公の場で尋常に立ち合えば、或いは兵庫が勝ちを取るかも知れんほう」

「ほう、あの兄上より強いと申されますか」

「かも知れぬ、だが、十兵衛と兵庫が二人で山にでも入り、命のやり取りをするとなると、違ってくる」

「山に入り密かに決闘、して結果は」

「血刀を拭いて山を下りてくるのは、十兵衛よ」

これ以上宗矩は語ろうとせず、左門も父の厳しい顔を窺い、静かに下がっていった。

暫くしてから、宗矩は庭園を後にし、屋敷内に設営した大道場に向かった。広い道場内の隅に二人の男女が座っていた。一人は見るからに屈強な男、年恰好は四十代、左の目に黒い眼帯をしている、隻眼であった。もう一人は細身のまだ若いと思われる小柄な女であった。宗矩が入ってくると、二人は深々と頭を下げた。

「右影、小炎、待たせたの。先程、十兵衛からの忍び状は読んだ、あやつにはまた走って貰わねばならぬ」

「殿、十兵衛様にはいずれの地へ」

右影と呼ばれた男が顔を上げて問うた。

「京の都だ、右影よ、立ち戻ったばかりで気の毒だが、近々わしの書状を持って大和に行け。十兵衛に伝えよ、禁裏の目配り怠るなど。

闇公卿なる者たちの暗躍が、裏柳生・耳目衆から報告がもたらされた。京の都の魑魅魍魎どもを、残らず始末せよと伝えよ。いつもの通り、公儀が動いた事は決して悟られてはならぬとな。闇公卿など

笑止千万、その名の通り闇に葬れと伝えよ」

「御錠、承りました」

右影が拝礼しながら答えた。

「さて、小炎よ、今夜ここに西念法師が参る、その時、片隅にて聞いておれ。ちと、ある予感がするでの」

小炎と呼ばれた女は、静かに頭を下げ、

「はい、畏まりました」

と、目を細めて答えた。

その夜、柳生屋敷大道場内の正面に但馬守宗矩、その前に身を縮めたようにして西念法師が座っていた。最前より、西念が放った不伝への刺客が失敗に終わった事を、宗矩に報告していた。宗矩は別段、驚く風でもなく、黙って聞いていた。話を最後まで聞いてから、

「鬼道・金縛りよな、やられたか」

苦笑しながら宗矩が呟いた。取り立てて気にするようにはとても見えない、極めて冷静な態度で端座している。

「あいや、面目ござらん、見事にやられました。伊賀忍び、形無しでいぢわる」

西念もにやりと笑い、坊主頭を一本しか無い手でつるりと撫でた。

「当方の耳目役からも報告が入ったは」

「承知しております。手前共の見張り忍びからの話では、その翌日も数名同じ手口でやられました」

「ほう、敵も意外とやりおるのう」

「なにせ、目を合わせると金縛り、目を逸らすと鈴音を使った耳からの金縛り、それに乗って風魔の三匹が仕掛けてくる、困った事でござりました。しかしながら、敵の術を知った以上、こちらも次の手を打つことができます」

「風魔の残党を雇い入れたとは、油断であったな。あの乱破どもとは、関ヶ原以前より因縁浅からぬ奴ばら、まあ、仕掛けて様子を見るは、いつものことよ」

「御意、次なるは伊賀の手練れと、甲賀の飛び衆を使いますれば、先ずは、しくじる事はないかと」

「ほう、甲賀衆が手伝ってくれるか」

「但州様、過去の忌わしい経緯じゆんは、双方水に流しております。同じ山里に棲む同族として、大恩ある徳川家に忠誠を誓うは当然のこと」  
「相分かった、まやかしの鬼道などに、二度と引つ掛かるまいぞ」

裏柳生や、伊賀忍びの者による暗殺計画実行の際は、常に失敗し

た時の事後対策として、見張り役をつける習わしである。柳生ではこれを耳目役という。此度も相手の剣技や術法を見極める為に、見たこと全ての状況を報告させていた。

ついでながら、話に出る乱破とは戦国時代、東国の山岳地帯を中心に、間諜として活躍した忍者集団の別称である。乱破を乱波と書かれることもあり、風魔衆はそれを代表する部族であった。乱破の活躍舞台は主に関東であるが、甲斐、信濃、越後、美濃、近江地方などの広範囲に亘って暗躍したのが、透破すっぱと呼ばれる忍者集団。透波とも書かれ、透破をとっぱと読むこともある。また、素破すっぱとか突破とっぱとも書かれ、そう呼ばれることもある。

「それはそれとして西念よ、どうしても解せぬ事がある。神君家康公の御子であらせられる紀州頼宣公が、何故、兄上の御嫡男であらせらる家光公に反目なさるのであろうか。何か深い理由があるとしてもいいのか。これには伊豆殿、春日殿も同じ疑問をお持ちのようだ。張孔堂なる不逞の輩に、密かに肩入れするはなんの為ぞ。わしの杞憂かも知れぬが、紀州公が、上様とは不仲の御弟君・大納言忠長卿と組んで、將軍家と事を構えるようなことがあつては、天下の一大事。紀伊、駿河に燻ぶる天下騒乱の火種は、断じて消さねばならぬ」

ここまで言って、宗矩はふうつと息を突き、一度目を伏せた後、また話を続けた。

「それとのおう、なにやら西国、九州辺りがざわめいておる。外様大名の中に御禁制・切支丹を密かに支援する動きが発覚した。島原辺りが何やらきな臭い」

「但州様の、六十余州の目配り、益々強くなりますな。御下命とあらば我ら伊賀衆、東国西国、何処へでも飛びまする」

「西念よ、そなたの父、先代・石州は、神君家康公の命とあらば、いかなる破天の業をも成しえた超人であった。その血筋の服部一門、頼みにしておるぞ」

西念は深々と拝礼した後、去っていった。

西念が退いた後、そのままじっと考え込んでいた宗矩は、やがて、

「小炎、出て参れ」

と、声を掛けた。道場の片隅の隠し戸が開いて、女が姿を現した。

宗矩の居る正面まで来て座り、小炎が答えた。

「西念法師殿に気付かれましたでしょうか」

「かも知れぬ、一向に構わん。それより聞いておったか、先程の偽不伝・玄一なる者の鬼道・金縛り。そなたの遣う居竦みと、どう違

うかの」

「はい、最前より伺うところによりますと、鬼道・金縛りとは、瞬時の催眠術のようでございます。双方が対峙している時は、己の目に光を当て、目がいかにも光を放ったような、いわば、見せ掛けの幻術、また、鈴を使っても同じ催眠の術かと心得ます・その技法、分かってしまえば、さほど恐ろしいことはありませんか」と

「うむ、居竦みとは違ふようだの」

「はい、居竦みとは、気合術でございます。十兵衛様が、古来伝わる気合術・居竦みに、工夫を重ねて考案されたのが心気・遠当とおあてにござります。私と兄の右影がこの極意を授かりました」

「知っておる、そなたの技は、投げ太刀との合わせ技であるな」

「はい、心気・遠当と飛旋剣、そしてもう一つ、飛走破の合わせ殺法にございます」

「十兵衛の奴、次から次へと、よくもまあ恐ろしい技を考え付くことよのう」

「十兵衛様には、劍神が取り憑いておるようでございます」

小炎の言葉に頷きながら、宗矩は、

「右影には別件で、出立前に一仕事して貰うが、小炎よ、そなた鬼

道・金縛りを破る自信があるかな」

「御前様、そのお役目、是非とも私に御命じ下さりませ、先程よりそれを願っております」

「矢張りの、言うと思うた、そなたらしい。心気・遠当とか申す居竦みの術、飛旋剣という投げ太刀、それに飛走破の合わせ技、やり損じた時はなんとする」

「十兵衛様からは、しくじった時は、そのまま走り去れ、と教えられました」

「ははは、なんと、そのまま、逃げ去れとな、ははは、それはよい」  
但馬守宗矩は、愉快そうに声を上げて笑った。そして一呼吸置いてから、

「小炎、其の方に命ずる。西念に加勢して偽不伝を始末せよ」

「ご下命、しかと承りました」

嬉々とした表情で小炎が答えた。

江戸中心部を五里離れたここは、茫々たる武蔵野の地、なぜか楠木不伝はこの地にある隠れ家に、二人の若い浪人風武士と対面していた。ここどころ、伊賀者に終始見張られていることを察知している不伝は、外出することを極力避けていたが、やむにやまれぬ事

情ができたのであろうか、昨日、張孔堂軍学塾の諸事を早めに片づけ、翌朝、暗いうちから道場を抜け出し、急ぎこの武蔵野にやってきたのであった。

正面に座る不伝から見て、右側の男に、

「熊谷三郎兵衛、近いうち駿河大納言卿が御国入りとなる、お主は、供に混じって駿河に参るのだ。暫くその地にあつて、他国から流れてくる浪人たちの中から、腕の立つ者だけを集めておけ」

「承知しました」

熊谷三郎兵衛と呼ばれた男は、笑顔で答えた。

「お主は、若いが東軍流の遣い手、上手く浪人どもを束ねられるであらう」

そう言った後、不伝はその横、左側の男に、

「金井半兵衛よ、先程話したように、わしの養子・富士太郎が、名を改めて民部介みんぶのすけと名乗っておる。あやつと一緒に、紀州公の御供で御国入りせよ。暫くその地にて二人とも潜んでおれ。やることは三郎兵衛と同じ、腕の立つ浪人衆を集めておくのだ」

「分かりました。民部介殿と行動を共に致しまする」

「わしは今、伊賀者たちに命を狙われておる、万一の事があつた場

合は、民部介を立てて、張孔堂の看板を、機を見て再び掲げてくれい。半兵衛、お前には鬼道をたっぷり仕込んだ、これから先も三郎兵衛と共に、民部介の力となってくれ」

「我ら二人、神仏に誓って、お師匠様の御意志を守ります。民部介殿のことは御案じなされませぬように」

「よくぞ申した、わしがまだまだこの先、存命であれば、かの地で次の指令を待て、御苦勞であった。兩名とも急ぎこの場を離れよ、伊賀者がすぐにも、ここを嗅ぎ付けてくるでの」

若い二人の武士は、足早に不伝のもとを去っていった。

外は陽が落ちようとしていた、不伝は、帰路を急ぐ風でもなく、ゆったりと歩いていた。野道がやがて、林と言うより森に近い鬱蒼と生い茂る山道に入った時、姿は見えず、陰に籠った低い声が不伝に囁いた。

「熊谷、金井兩名には、どうやら追手は見られず、無事、帰路にいた模様、されど、我らの行く手に、刺客が潜んでおるようですぞ」

「矢張りのう、また血祭りにしてくれようか」

不伝が姿無き声に答えると、

「いや、まだ陽が残っているうちに、不伝殿はこの道を避けて、先

を急いで下され。我ら三鬼、森に潜む伊賀者を、さっさと片付けてから追い付き申す」

「任せた、わしは先を進むとしよう」

不伝が歩を早め、先へ進むと、道が細く二俣に分かれていた。左の道に小さな道標が立っている、江戸へ三里とうつすら書かれています。何度も見慣れているのか、不伝は振り返りもせず、より細い右に曲がる道を取り、どんどん先に進んでいった。

一方、不伝が道をそれて間道をとったのを見てとり、風魔三鬼は、伊賀者を前回同様に悉く始末しようと、危険を顧みず刺客が潜む森の中に、身を隠しながら入っていった。

「蒼鬼斎よ、先手を打ってこちらから仕掛けるのは、ちと無謀ではないか」

「白鬼入道、案ずるな、また金縛りにして、地獄に送り込んでくれるは」

「そうだ、風魔の恐ろしさを見せてやろう」

あとは無言となり、三鬼はそれぞれ三方に散った。

薄闇の森に、ひゅうつと伊賀忍び笛が鳴り響いた。ぴしつと空を切る音が走り、伊賀忍びの使う十字手裏剣、八方手裏剣、飛び苦無くないが

風魔三鬼めがけて放たれた。巧みに三鬼たちはこれをかわしながら、風魔乱破の飛び道具、棒手裏剣を投げ付ける。かつ、かつ、かつ、と、木に突き刺さる音だけが闇に響く。伊賀忍び者、此度は手練れ揃い、得意の飛猿陣を取り、四方八方から風魔三鬼を攻め立て、ある方向に追い込もうとしていた。と、その時、三鬼の一人が、左手に鈴を掲げて振った。りいんと流れる鈴の音、それを合図にまた一方でも、りいんと鳴り、少し間隔があって他方でも、りいんと鈴音が響いた。移動しながら三方から鈴音が闇に流れる、風魔三方陣。この間隔を崩さず、三鬼が宙を跳ぶ、木から木へ身を移しながら鈴音が鳴り渡る。しかし今回は違った。風魔の鈴音に合わせるように、伊賀忍び笛が大きく鳴り響く。三方で鈴音が鳴る度に、忍び笛が同じく三方で、闇を裂くように鋭く流れる。りいん、ひゆうう、りいん、ひゆうう、鈴音を忍び笛が鋭く打ち消す、これにより伊賀衆の動きは、まったく止まらず、攻撃が続けられた。風魔三鬼による鬼道・金縛りの法術が敗れたのであった。

「蒼鬼斎、引くぞ」

風魔の一人が叫んだ。すかさず伊賀者の攻撃が激しく襲う、辛うじてかわしながら、三鬼が三方陣を解き、一方に向かって飛ぶが如

く走った。森から抜け出ようとする三鬼の姿が、月光を浴びて現出した時、彼らの頭上から、びゅつ、と、数発の空気を切る乾いた音が走った。

「しまった」

三鬼の一人が叫んだ。

「ぬっ、これは」

もう一人も呻いた。三人の影がぴたっと動きを止めた。

「白鬼、走れ、ここはわしが止める」

「俺も残る、白鬼、去れ」

叫んでいる間に伊賀衆が追いつき、それぞれが鎖鎌、手槍、忍び刀、得意の武器で三鬼を包囲した。

「抜かったは、囲みを破るぞ、白鬼入道よ、行け」

風魔の二人が片手に何かを握り、左右に跳んだ、と、同時に宝祿ほうろく・火薬玉を、伊賀包囲陣の地面に向けて叩き付けた。一瞬、耳を劈く破裂音、ぱつと横に跳んで爆発を避けた伊賀衆の、円陣の一角が崩れた。そこを血煙を上げて、風魔の一人が囲みを破って逃げ去る、それを伊賀者数名が後を追った。

「流石、風魔の乱破よ、咄嗟に誰が浅手、深手を負ったか、見極め

るとはのう」

伊賀者の中から、刺客の頭目と思われる一人が声を掛けた。

「来い、伊賀者、地獄の道連れにしてくれる」

深手を負った風魔二鬼が、太刀を下げたまま挑発した。

「どうやら、朱鬼斎と蒼鬼斎のようだの、これまでだ」

伊賀者の頭目が右手を挙げた、伊賀衆の一斉攻撃に、風魔乱破、

朱鬼斎と蒼鬼斎は、全身を血に染めて倒れ伏し、絶命した。

死闘が終結し、伊賀衆、刺客の頭目が、忍び頭巾を被ったまま、

樹上の飛び道具衆に声を掛けた。

「甲賀飛び衆、礼を申す。お陰で皆が無傷で、相手を仕止める事が

できた。やはり飛び道具は甲賀衆には敵わん。借りができたの」

樹上から声が返ってきた。

「なんの、伊賀の衆、貸し借りはないぞ。我ら甲賀の者は、初代服

部石州殿には、些か恩がござる。こちらもお陰で、改良した飛び道

具の試しができ申した。また何時でも声を掛けて下され」

甲賀の忍者は、伊賀者とは少しばかり戦い方が違う。甲賀は集団

の戦闘が得意で、それぞれが会得した武技、術法、道具、薬法、な

ど、細かく分かれて小部隊を構成している。西念の依頼で今回出動

したのは、飛び衆と言われる甲賀飛び道具の専門部隊であった。

風魔の朱鬼斎、蒼鬼斎に、致命傷を負わせたのは、彼等が考案し、工夫と改良を重ねた、気筒という空気を圧搾して玉針を飛ばす武器であった。元々は、南蛮渡来の鉄砲と一緒に、その技法が伝来されたが、鉄砲ほどには殺傷力が無く、上手く空気が圧縮できぬ事もあり、戦国時代の武器としては登場を見なかった。しかし、甲賀衆の中に、この武器を工夫しようとする者が現れ、元来、吹き矢に使用する鉄筒を利用して考案されるに至った。気筒と名付けられたこの武器は、いわば空気銃の類いの物である。

では、忍者と鉄砲の関係はどうかであろうか。鉄砲を早くから取り入れ、武器として活躍した忍者集団には、紀州を本拠地とする根来衆がある。伊賀、甲賀はどうか、同じ山岳地帯に棲むこの二つの部族は、鉄砲を嫌った。訓練を重ねた忍者の嗅覚は、常人の想像を絶する程である。鉄砲即ち、種子島と呼ばれる火縄銃は、火種を使い、火薬に点火して発砲する。忍者にとって、火種、火薬の臭いは、遙か遠方にも容易に察知する事ができた。敵方の間諜に、それと知れる武器を、伊賀、甲賀は取り入れるをしなかった。先刻、手負いの風魔の二鬼が、伊賀者に向けて投げ付けた宝祿を、跳んでかわ

す事ができたのも、鋭い忍者の嗅覚で、火薬玉と咄嗟に察知したからであった。宝祿とは忍者が使う、鳥の子とも呼ばれる火薬玉、煙玉の事である。懐中に常時、特殊の道具に火種を忍ばせ、素早く点火して投げ付け爆発させる。現代で言うところの手榴弾である。

今回の死闘の中で分かった事は、伊賀衆の用意周到な作戦にあった。鬼道・金縛りを破り、甲賀飛び衆が、南蛮渡来の気筒を持って待ち構える位置に、伊賀衆たちは巧妙に戦いながら、風魔三鬼を追い込んでいったのだ。

さて、話を不伝の方に移そう。夕暮れから月が上がり、闇が濃さを増す頃、帰路を一人急ぐ不伝の先方に、人影が映った。目を据えて見ると、白地が灰色に見える装束に身を包んで、手に小太刀を抜き提げた、若い女が一人立っていた。

「ほう、女か、きさまも伊賀の刺客か」

不伝が不敵に笑い、女に声を掛けた。

「楠木不伝こと玄一坊、汝に殺された正真正銘の大饗正辰の末娘・桔梗なり。伊賀衆の手を借りず、汝を討つ」

「馬鹿を申すな、正辰に娘などおろうか。わしを謀ろうとて、そうはいかぬ」

不伝は一転して語気鋭く女に浴びせた。

「玄一、父の仇、敵わぬまでも恨みの一太刀、受けてみよ」

小太刀を下段に構えたまま、女は不伝めがけて突っ込んで行く、低い姿勢で、不伝の眼前まで迫ろうとする瞬間、

「女、目を見よ」

叫んで、不伝の双眼が光った。同時に、桔梗と名乗った女から、裂帛の気合が発せられた。一瞬、不伝の五体が硬直し、視界から女の姿が消えた。

「ぎゃっ」

不伝が断末魔の奇声を発した時、その口から鮮血が溢れ出た。喉元に女が投げ付けた小太刀が、鰐元まで深く刺さり、後方に貫かれた切っ先が飛び出していた。不伝が膝から落ちて、地に突っ伏した時、女は真横に走り去り、五間先に立ち止まっていた。

言うまでもなく、女は小炎であった。正辰の娘という偽りも、女白装束の姿も、不伝に与える幾ばくかの戸惑いと、油断を誘うに充分な言葉となった。二人の勝負はあっけなく終わった。

不伝が鬼道・金縛りで仕止めようと、眼光を放った時、小炎は走りながら、心身の全てを集中、凝縮した気を、気合一声、不伝に浴

びせた。心気・遠当の技であった。

小炎の師、柳生十兵衛が、気合術・居竦みに工夫を重ねた心気・遠当とは、他を圧倒する気を発して、一瞬、相手を硬直せしめる不動体の技であった。小炎は気合と同時に、小太刀を投げ付ける裏柳生・飛旋剣の合わせ技を遣い、不伝の視界から消えた。小炎は不伝が立つぎりぎりの位置を見切り、低い姿勢で走って間を詰め、気合と投げ太刀を同時に浴びせて、一点を定めた地点を蹴って、左方、真横に跳んで、そのまま走り去ったのであった。

この走法も、裏柳生の忍び衆が、密かに鍛錬する飛走破という忍び走りである。それもこれも、全て裏柳生の総帥、柳生十兵衛の編み出した暗殺剣法であった。なんと、小炎は、その三つの合わせ技を同時に発揮できる、天性の女忍び、くノ一、だったのである。ちなみに、兄の右影も、小炎も、無論、本名ではない、忍びの者たちの中で使う、通り名である事は言うまでもない。

「見事なり」

小炎の背後から声がした。近づいてくる姿は西念法師であった。

「西念様、差し出た私をお許し下さりませ」

小炎は振り向いてから、立ったまま手を前に揃えて頭を下げた。

「なんの、但州様の御指示通り、上手く事が運んだのだ、侘びる事はない。これで良いのだ」

小炎は、倒れた不伝から、顔色一つ変えず小太刀を抜き取り、血を拭き取ってから鞆に納めて、西念に言った。

「私はこれにて引き上げますが、よろしゅうございますか」

「おお、後始末は我らが仕事、行かれよ。この西念も後ほど、但州様に御報告に参るとお伝えあれ」

一礼した後、小炎は足早に走り去って行った。

翌日、江戸城より帰宅した宗矩は、着替えを済ませ、庭園内の池の辺で、小炎と二人、話をしていた。

「西念から詳しい報告を聞いた。先ずは片付いたようだの」

「はい、しかし、風魔の一人がまだ逃げているようでございます」

「白鬼入道とか申す乱破だそうだ、伊賀衆の手から逃げおおせるとは大した者よ」

「御前様、風魔の残党はまた現れるかも知れませぬ。恨みを御前様に向ける事も考えられます、何卒、御身边、御用心下さりませ」

「うむ、そうしよう。今は右影もそなたも居ることだし、案ずる事は無い」

「これで事件は片付いたのでしょいか」

「かも知れぬ、いや、どうかな、或いはこれから始まるのかも知れんぞ」

「御前様、私は暫く御屋敷に留まって、御身边警護を務めたく存じます」

「そうか、いま少し内偵する事もあり、暫くそなたは当屋敷におれ。どうも何か不吉な予感がしてならぬ、外れてくれれば良いのだが」

宗矩はどんより曇った天空を見上げて言った。

怪事件が闇の世界で終結したかに見え、また暫く平穏な日々が続く中、柳生但馬守宗矩は、相変わらず幕政の中で多忙を極めていた。

そんな折、宗矩の下に朗報がもたらされた。禅宗、臨済宗の名僧、沢庵宗彭が流刑地、出羽国より江戸に上って来たという。

「沢庵禅師が江戸に参られたとな、なんとという嬉しき事かな、有難や。わしの積年の願いが叶った」

宗矩は珍しく喜びの声を上げた。

京都、大徳寺の元住持職であった沢庵宗彭は、朝廷からも信任の厚い天下の名僧であった。徳川政権が樹立された時、これまで力を誇示してきた寺社への締め付けを目的に、幕府は厳しく取り締まる

寺院法度を制定した。さらに、朝廷と大きな寺院との、これまでの強い関係を断ち切る目的で、幕府は禁中並公家諸法度も公布し、その強権を実施した。特に、朝廷と有力な関係にあった大徳寺には、より厳しい処置を執ろうとしていた。

その制度の中に、これまで天皇のみこと詔で決まっていた大徳寺住持職は、今後は幕府が認めた者に限る、と明示し、また、天皇から賜りて、高僧が着用する紫衣は、これも幕府が認めた僧侶に限ると、重ねて朝廷に横槍を入れたのである。そんな時、起こるべくして事件が起きた。後世に伝わる「紫衣事件」であった。

後水尾天皇が、幕府に諮る事なく下賜した紫衣着用の勅許を、幕府は御法度違反と見做し、勅許状は無効であるとして、京都所司代に紫衣の取り上げを命じた。この幕府の強硬な行為に、大徳寺住持を退いて郷里出石・宗鏡寺に居た沢庵宗彭が、反対の意志を世間に示す為、すぐに上洛した。

沢庵は、大徳寺住持・宗珀と図って、関連する寺院の僧を纏め、妙心寺の単伝、東源など同調する高僧も仲間に入れ、一大反対運動を展開するに至った。これに激怒した時の將軍・秀忠は、幕閣に強権発動を指令した。幕府によって、紫衣事件の指導者、沢庵宗彭は

出羽国上山に流罪となり、連座した宗珀は陸奥国棚倉へ、単伝は同じく陸奥国由利、東源は北の果て津軽へと、各々流罪となった。

柳生但馬守宗矩は、若い時分に沢庵宗彭と知り合い、意気投合し、親交を深めた。その過程で沢庵の人柄に心酔し、禅の教えを受けると共に諸々の薫陶を受けた。歳を重ねた今日、宗矩は自ら得た禅こんにちの教えを、剣の道に生かそうと日々精進していたのである。また、宗矩は、事ある度に、沢庵宗彭の早き赦免を幕府に申し入れる一方、徳川家に絶大な影響力を持つ南光坊・天海大僧正に理解を求めた。説得が功を奏し、天海の助言を上手く取り付けて、將軍二代・秀忠、三代・家光に嘆願書を提出し、沢庵宗彭の赦免に向けて、宗矩は大きく尽力していたのであった。

宗矩から常日頃、沢庵宗彭の偉大さを聞かされていた家光は、いずれ赦免となった暁には、時期を見て沢庵との対面を約束したのである。宗矩から御流儀・柳生新陰流兵法と、その教義の一つとして禅の教えも受けていた家光は、沢庵を京には戻さず、江戸に在って、関東に於ける民衆の、心の支柱となる事を望んだ。その目的の為、いずれ品川方面に、沢庵を初代住職とする寺院を創建する事も、宗矩に打ち明けた。それほど家光は、宗矩を心から尊敬し、信頼して

いたのであった。

その努力がようやく実って、此度、沢庵宗彭たちの仮・御赦免が幕府から発令された。内容は、来春を待って正式に御赦免とするが、それまでは京都に上る事は許されず、江戸に入る事のみを許可したのであった。その待ちに待った沢庵が、出府して神田・広徳寺に入ったという報せが宗矩に届いたのである。

「なんと嬉しき事か」

宗矩は目に涙を浮かべて喜んだ。

良く晴れた日、御役目・登城の無い日を選んでいた宗矩は、いつもの駕籠に乗るのを避けて、数名の供だけの軽装で、沢庵が待つ神田・広徳寺に向かった。そうは言っても幕府重臣の身である故、公儀御庭番同心たちが密かに警護をしていたのは言うまでもない。

広徳寺の山門をくぐり境内に入った時、出迎えの僧侶とその後方にも並ぶ僧に混じって、一人片方の手を袖に隠している者がいた。宗矩はちらっとその僧を横目で見やり、別に気にも留める風でもなく、どんどん奥院に進んで行った。本堂書院の入口に、出迎えの僧侶が立っていた。宗矩には一目で分かる、懐かしい沢庵宗彭の日焼けした笑顔があった。

書院にて双方が座り、型通りの対面の挨拶が取り交わされた。

「久し振りに御尊顔を拝します。沢庵禅師には御壮健の様子、また此度は目出度く仮・御赦免となられ、御出府なされましたる段、誠に祝着至極にござります」

「御丁重なる御言葉、畏れ入ります。但馬守殿には、大いなる御尽力を賜り、お陰様で拙僧たちの仮・御赦免となり、江戸出府の運びとなりました。衷心より厚く御礼申し上げます」

拝礼の後、顔を上げてお互いを見た時、笑いがこみ上げてきたのか、沢庵が、

「あつはつはは、懐かしいのう、棒振り殿よ。お変わりないの、あの又右衛門が、いまや、幕府惣目付・但馬守殿じゃからの、一大出世、目出度いものよ」

「これは御挨拶、痛み入る、沢庵殿。貴僧から毎度頂いた書状は、その言われる棒振り剣法の、教義の基にすべく、我家の宝物・書簡集となりて、大切に保存しているものを」

「ほほう、それは知らなんだ。それはそれとして、よく幕府が此度、我らを許す気になられたものよ」

「あいや、あの一件は、朝廷を軽んじる幕府の失政にござる。今日ま

こんにち

で流刑が長引いたのは、幕府の詰まらぬ体面にござった。幕閣の一人として深くお詫びを申し上げる次第、この通りにござる」

宗矩は居住まいを正し、深く沢庵に頭を下げた。

「これは、頭を上げられよ。愚僧の赦免に当たり、但馬守殿が八方手を尽くされた事は存じております。こちらが先ずは御礼申し上げまするところでござります」

この後、久し振りの邂逅に、二人の寛いだ楽しいな会話は続いた。

「沢庵殿にお訊ねしたい、この後、戦乱の無い日々が訪れるものでしょうか」

「長い長い戦国の世が、ようやく治まったかに見えるが、今、少々争乱は起こるであろうか。徳川幕府が、帝を軽んじる事がなければ、治安は保たれ、太平の世は参りましょうな。但馬殿たちが広めた剣法も、乱世ならともかく、平時に於いては、変わらねばなりません。戦時の、人を殺める人斬り剣法から、平時の、人を生かす活人剣法、これに悟りを開いて世に広められたし」

「活人剣にござりますな。沢庵殿に御礼を申します、御教訓、身に沁みましてござる。ご期待に沿う様に、必ずや精進勤めまする」

宗矩は、力強く沢庵に答えた。

沢庵と別れて、広徳寺を後に帰路につく宗矩は、沢庵が先程言った活人剣という言葉を噛み締めていた。無事に柳生屋敷に戻ってからも、宗矩は一人書院に籠り、黙考を続けていた。

嘗て、新陰流開祖・上泉伊勢守信綱は、高弟である父・石舟斎宗庵に、無刀取りを工夫するように命じた。無刀取りとは、太刀を持たず相手と戦うことにある。それは先師・伊勢守が石舟斎に、人を斬らずに勝つ事を念じたのであろう。父・石舟斎は、伊勢守の期待に応えて無刀取りの極意を会得し、新陰流の一国一人の印可を受ける事ができた。自分はどうか、先の大御所家康公から、

「宗矩よ、我が徳川百年の大計の為に、汝、仏心を捨て、鬼となりて、將軍を陰から支えよ」

徳川家康の遺命を受けて、宗矩は兵法家の顔を保持しながら、ある時は非情に徹し、幕政を陰ながら支えてきた。宗矩の裏指令を受けて、幕府の為に陰で暗躍する嫡男・十兵衛の手は、血で汚れている。

……倅・十兵衛の血で汚れた手は、言い換えれば自分の手である。あやつが自分の代わりに手を汚しているのだ。

宗矩は自問を続ける。開祖・上泉伊勢守信綱や父・石舟斎宗庵は、

血で汚れた自分や倅・十兵衛三蔵が、新陰流正統を継ぐことは望むまい。故に、父・石舟斎が溺愛する嫡孫・兵庫助利蔵に正統の座をあえて譲ったのである。

天下泰平の為、徳川政権を磐石にするには、陰で汚れ役をする者がどうしても不可欠なのだ。政まつりごとは綺麗事では成り立たない、清濁併せ持つ宗矩に、家康は汚れ役を命じたのである。

宗矩は、幕閣として天下の政の一方を担った以上、自分と十兵衛の二人だけは、汚れる役目は引き受けよう、血に塗れるまみるのは我ら父子だけでよい、そしてこの二人だけで終わりにしたいと願っていた。

そして今、ずっと頭から離れない、沢庵が言った活人剣。禅の教えと、その人を生かす理念を、剣法に取り入れて昇華するには、殺人と活人の、両面を知り尽くした精神の持主ではないと、体現する事はできない。甥の兵庫助利蔵は、剣技に長じた真の兵法者となり、立派に一家を成す存在となった。だが、禅の精神と剣法の一致、この思想を確立する事は、彼にはできない。やはり、沢庵禅師から薫陶を受けた自分にしか、世に残す事はできぬかも知れない。

ここまで考えて、宗矩は決意を固めた。やはり、自分が考案し、書き残して末代までこの流儀を伝えたいと。宗矩はいっしか真剣に

そう考えるようになっていた。

柳生但馬守宗矩と、沢庵宗彭との間に取り交わされた書状は、書簡集として、沢庵が書き記した『不動智神妙録』と共に、大切に柳生家に伝わり、現代に残っている。

この数年後、宗矩が書き記す事になる『兵法家伝書』の中に、沢庵から教えを受けた禅と剣法の一致の精神を、剣禅一如という思想に完成され、活人剣が平時に於ける新しい剣法理念となって後世に伝えられた。ちなみに『兵法家伝書』は、進履橋、殺人刀、活人剣、の三部構成となっており、心法の重要性を説いている。この宗矩の記した『兵法家伝書』は、同時代の剣客、宮本武蔵の記した『五輪書』と並び、近世二大兵法書として賞賛されている。

書院で一人黙考する宗矩に、襖の外から女の声がした。

「御前様、灯りをお持ちしました」

小炎であった。

「うむ、もうそんな刻限か、入れ」

小炎が部屋に入ってきた。入れ替わりに宗矩は立ち上がり、廊下に出て、薄暗い外に目を凝らし、庭園の景色を眺めた。

「御前様、広徳寺よりお帰りになられてから、ずっとお部屋に籠ら

れて、さぞお疲れでござりましょう」

小炎が部屋に蠟燭を灯しながら言った。

「小炎」

宗矩が小声で呼んだ。

「はい」

「黙って聞け、風魔の乱破が庭先に来ておる。これからわしのする事を陰で見ておれ、絶対に手出し無用。よいな、きつく申し渡す、黙って見ておれ。よいな」

宗矩は脇差を腰に差し、草履をしっかりと履いて、暗い庭園の中にゆっくり入っていった。その時、いずこからか、りいん、と鈴の音が闇に流れ、宗矩の歩行が止まった。少し間があつてまた、りいん、そして三つ目の鈴音がりいん、止まっていた宗矩が、目を閉じて再びゆっくり前方に進んだ。鈴音が短い間隔で鳴り続ける、ゆっくり前に歩いていた宗矩の足が一寸もつれた。その刹那、ひゅっ、ひゅっ、と空を切る音、同時にばん、ばん、ばん、と鋭い音が空間に炸裂した。

その場に、宗矩が悠然と脇差を抜いて立っていた。その足下近くに、棒手裏剣が散らばって落ちていた。曲者が投げ放った手裏剣を、

宗矩は暗闇の中、咄嗟に抜刀し、いとも簡単に打ち払っていたのだ。

「風魔の乱破よ、出て参れ」

落ち着き払った宗矩の声が、暗闇に響いた。

前方に、ぼうつと人影が浮かび出た。

「先刻、広徳寺におった坊主よな、後をつけておったのは承知。白鬼入道と申したかの、伊賀衆からよう逃げ延びた。だが手負うているとは難儀なことよ」

「よくぞ見破った、但馬守。きさまが、これほどに遣うとは思わなかったは、見事な太刀捌きよ」

白鬼入道が薄ら笑いを浮かべて宗矩の前に近づいてきた。

「鬼道・金縛り、気持ちよく眠らせて貰ったは」

「ほざくな、まだこれからだ、風魔の恨み晴らしてくれん、参る」

「やめておけ、白鬼よ、ここは退いて、他日を期してはどうかね。

今宵は、手負いを斬る気にはなれぬ」

「生憎だな、但馬守、わしはここを死に場所と決めておる。恨みの

一太刀浴びせて、道連れにすると思え」

「やむを得ぬ、では白鬼入道よ、尋常の立ち合いをしようではないか、その懐に忍ばせた宝祿を捨てよ。これでもわしが丹精を込めた

庭園じゃ、その火薬で台無しになるのは御免蒙る。いかがかな」

「風流なる戯言、だが尋常の勝負は望むところ、無駄口はこれまでだ、参る、但馬守」

白鬼入道が忍び太刀を抜き払い、大上段に振り被った。その時、すすつと人影が宗矩の背後に走り寄ってきた。

「御前様」

声の主は小炎だった。

「小炎、手出し無用、君命である、下がっておれ」

宗矩がきつい語調で叱咤した。

「や、その女も忍びか」

白鬼入道が叫んで、一步退いた。

「なに、気にするな、立会人とでも思うが良い」

宗矩が、にやっと笑い、数歩、間を縮め、脇差を下段に構えて言った。

「冥土の土産に秘剣を見せてやる、参れ」

「ぬっ、死ね」

叫ぶと、白鬼入道の双眼が光った、鬼道・金縛り。同時に白鬼入道が地を蹴って跳んだ、一瞬、二人の影が交錯した。白鬼入道の左

首から右胴、腹にかけて血吹雪が立ち昇り、太刀をだらりと下げ、空を睨んだまま動かない。そしてゆっくり、白鬼入道は膝から崩れ落ちた。脇差を懐紙で拭い、鞘に納めながら宗矩が、

「見たか、小炎」

と声を掛けた。

「しかと見届けました、御前様、お見事でございました」

と、小炎がほっと胸を撫で下ろしたように答えた。

決闘の後始末を近臣に言い付け、宗矩と小炎は奥の間に引き上げた。

「右影は国許に向かったか」

「はい、明日にも柳生の里に入ることでしょう」

宗矩の着替えを手伝いながら小炎が答えた。

「先程の剣技、夢想の位と名付けておる」

「初めて見た技にございます。風魔の乱破が鈴音を鳴らし、御前様を金縛りにして手裏剣を投じた時は、身の縮む思いでした。御前様が、なにがあっても手出し無用と、お命じになられたのも、この技法が会得されておりました事、只今、納得致しました」

「鈴音を使った金縛り、眼法による金縛り、いずれの術も、敢て、

受けながら吸収してしまう体術。己に暗示をかけ、無我の境地となり、夢想の中で、振るう剣法、これが夢想の位の極意だ」

「御流儀にこんな技があります事、誠に畏れ入りました」

「いや、先師・伊勢守様から、我が父・石舟斎に授けられた剣法ではない。わしが若い頃、密かに他流との勝負から得た、秘中の秘である。恐らく、十兵衛も、兵庫助も、まだ体得してはおらぬ筈だ。敵に勝つことを望まず、己が勝つことすら忘れ、無我になり勝負の行方は知らず、夢想の中に身を置き、夢想の中での一振り、これだけだ」

宗矩は驕る事無く、自分の技量を知っていたのだ。一流の剣法者となった甥の兵庫助利厳と、仮に立ち合った場合、木刀での尋常な立ち合いなら、三度立ち合って、三度、後れを取るやも知れぬ。何故なら、稽古試合では夢想の位を遣わぬからだ。だが、余人を交えず、一度だけの真剣勝負となれば、必ずや、勝ちを取るのは自分であると確信していた。

「これでようやく、全てが片付きました」

「そう思うか、小炎、わしには何やら、この先また何か起こりそうな気がしてならぬ」

宗矩は、障子を開け、縁に出て、夜空の月を見上げながら、小炎に答えた。今宵の宗矩に、やがてこれから巻き起こる大きな事件が、その身に振り掛かって来ようとは、無論、知る由も無かった。

## 第一話 完